

音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発 ～児童生徒が主体的に取り組める伝統音楽の授業デザイン～

地域教育支援部 研究主事兼指導主事 浅井 ちとせ

要約

平成29年に中学校学習指導要領、平成30年に高等学校学習指導要領がそれぞれ告示され教育課程で音楽を学ぶ意義について「生活や社会の中の音（芸術科音楽Ⅲ：多様な音）や音楽、音楽文化と豊かに（芸術科音楽Ⅰ：幅広く/音楽Ⅱ、Ⅲ：深く）関わる資質・能力の育成」として教科及び科目の目標に明記された。この資質・能力の育成のため、音楽科授業におけるパフォーマンス課題を当センター講座で示したいと考え、令和2年度に上記テーマを設定し、副題を変えながら同一のテーマで研究を続けてきた。

今年度も上記テーマを踏襲しながら当センター講座で能楽講座を策定し、受講対象者を従前の中学校及び高等学校の音楽担当教諭等から小学校教諭に枠を広げて実施した。その成果と課題を検証し、小学校、中学校及び高等学校をつなぐ授業デザインを示すことによって、現行学習指導要領音楽科の課題である「我が国や郷土の伝統音楽」に関する学習の充実に資することを目的として上記副題で研究することとした。今年度の能楽講座の受講者は小学校教諭が多かったことから、中学校及び高等学校で能楽教材を学ぶまでに身に付けたい資質・能力についてのカリキュラム・デザイン演習を実施した。本講座に初めて参加した小学校教諭から多くの授業デザインのアイデアが出され、中学校及び高等学校教諭の受講報告から小学校から高等学校までの音楽科の指導内容のつながりの大切さに関する気付きが見られた。異なる校種であっても能楽を教材化した授業デザインについて交流ができたことを本講座の成果とし、そのいくつかのアイデアを音楽科のパフォーマンス課題として提案し、中学校や高等学校での能の学習につなぐ授業デザイン及び伝統音楽の教科横断的なカリキュラムマネジメント例を示したいと考えた。

キーワード：学習指導要領音楽科の目標が示す資質・能力の具現化
能の教材化、授業デザイン、授業構想
音楽科で育成する資質・能力の系統性

1 研究の経緯

中学校学習指導要領音楽編及び高等学校学習指導要領芸術編音楽Ⅰ～Ⅲの各目標に示された「生活や社会の中の音（芸術音楽Ⅲ：多様な音）や音楽、音楽文化と豊かに（音楽Ⅰ：幅広く/音楽Ⅱ・Ⅲ：深く）関わる資質・能力の育成」を具現化するため「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発」をテーマとして令和2年度から研究を続けている。教育課程で音楽を学ぶ意義について、中学校学習指導要領音楽編では「生活や社会の

中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成」、高等学校芸術科音楽Ⅰでは「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力の育成」と各目標に示されている。この資質・能力の育成のため、音楽科授業におけるパフォーマンス課題を当センター講座で示したいと考え、令和2年度に上記テーマを設定し、副題を変えながら同一のテーマで研究を続けてきた。

令和2年度、3年度は副題を「伝統音楽とICTをつなぐ創作課題」と設定し、当センター音楽科講座で伝統音楽の実技と音楽創作アプリケーションの活用を関連させた音楽科講座を策定、実施したところ、受講者が実際の授業で講座で示した創作課題を試し授業公開される例もあった。

令和4年度は、音楽担当教諭の要望に応じて初めて能楽講座を策定し、中学校及び高等学校の音楽担当教諭を対象として、謡（うたい）の実技及び能を教材化した授業デザイン演習を実施した。初年度能楽講座での授業デザイン演習は、どのように鑑賞を深めるかについての鑑賞分野の授業構想が多かった。授業構想の豊かなアイデアは、指導者自身が能楽を体験しその魅力の発見から生まれると考え、その後3年間続けて能楽実技講座を策定実施した。

令和5年度は「『能楽の謡のリズム』を中心として」と副題を設定し、「能の節を謡ってみよう&タブレットでお囃子を創ろう」講座を、令和6年度は「能の授業デザインと題材を貫く問いの設定」と副題を設定し、「能の連吟を楽しもう・お囃子を創ろう」講座を行い、共にタブレット端末での囃子音楽の創作及び謡の実技を実施した。令和6年度講座では謡に仕舞を加えて実技を行い、生徒が主体的に取り組むことができる能の授業デザインを受講者が協働的に考える演習を実施した。なお、昨年度の当研究では令和5年度と6年度講座の2年間の受講報告及び同一質問内容のFormsアンケート結果から音楽科授業への活用意欲等を比較して、講座の成果と課題を研究紀要にまとめた。

2つの年度で興味を持った内容は年度で異なる結果であったが、授業で活用したい内容は両年度共通して、タブレット端末を用いた囃子創作であった。この結果を受けて、令和7年度は音楽科におけるICT活用に関しては別講座を策定し、能楽講座においては能の授業デザインに重点を置こうと考えた。

令和6年度の能楽講座の成果と課題として、研究紀要のまとめにおいて次のように示した。

- 伝統音楽分野において、能楽は授業担当者がどのように授業を展開するべきかについて困難を感じる教材の一つであることを従前の当センター音楽科講座や初任者研修講座等で確認してきたが、本講座の実技や演習によってその魅力に気づき、授業構成のヒントを見出したことが受講報告等から確認できた。
- 令和4年12月の中央教育審議会答申総論4(1)の「『新たな教師の学びの姿』の実現」として、教師の学びの姿と子どもたちの学びの姿の相似形が示されているように、教師が能動的に能の授業を構想し授業実践することによって児童生徒の伝統音楽を継承、発展、創造する資質・能力が育まれると考えられる。

中央教育審議会答申総論で教師の学びの姿と子どもたちの学びの姿の相似形が示されているように、教師が能の魅力を発見することが授業構想のアイデアにつながると考え

さらに授業構想を充実させるため、令和7年度講座は小学校教諭を含めて全校種を受講対象として講座を企画・実施することとした。

2 当センター能楽講座について

(1) 令和4年度から6年度の能楽講座

ア 令和4年度能楽講座

講座名：「『我が国の伝統音楽』の指導と評価の一体化講座～能楽『敦盛』を教材として～」講座

実施日：令和4年10月21日（金）13時30分～17時00分

講座のねらい：能楽「敦盛」の講義及び実習等を通して能楽の理解を深めるとともに、能楽の学習を通して育む資質・能力を考える。

講師：観世流能楽師 河村 晴久氏（同志社大学 客員教授）

受講者：18名（中学校14名、高等学校2名、特別支援学校2名）

研修内容：【講義Ⅰ】（13:00～14:00）能楽「敦盛」を味わおう・深めよう

【講義Ⅱ・実習】（14:00～15:00）能楽「敦盛」を謡おう

【演習】（15:00～17:00）能楽「敦盛」を授業デザインしよう

イ 令和5年度能楽講座

講座名：中高音楽「能の節を謡ってみよう&タブレットでお囃子を創ろう」講座

実施日：令和5年8月17日（木）13時30分～17時00分

講座のねらい：能「敦盛」と「羽衣」の謡の実技とタブレット端末での囃子創作を通して、能楽の理解を深め、能の学習を通して育む資質・能力を考える。

講師：宝生流能楽師 水上 優氏（東京藝術大学音楽学部邦楽科准教授）

受講者：20名（小学校1名、中学校15名、高等学校4名）

研修内容：【講義Ⅰ・実習Ⅰ】（13:30～15:00）能「敦盛」と「羽衣」を謡ってみよう

【実習Ⅱ】（15:00～16:00）タブレットで能のお囃子を創ろう

【実習Ⅲ】（16:00～17:00）連吟の楽しみを感受しよう

ウ 令和6年度能楽講座

講座名：中高音楽「能の連吟を楽しもう・お囃子を創ろう」講座

実施日：令和6年8月8日（木）10時30分～17時00分

講座のねらい：能「敦盛」や「羽衣」の謡の実技とタブレット端末による囃子創作実技を通して、能の授業デザインを考える。

講師：観世流能楽師 山崎 芙紗子氏（京都先端科学大学特任教授）

受講者：12名（中学校8名、高等学校3名、特別支援学校1名）

研修内容：【実習Ⅰ】（10:30～12:00）能「敦盛」「羽衣」の囃子合奏・タブレット活用

【実習Ⅱ】（13:00～15:00）能「敦盛」「羽衣」の謡・仕舞

【演習】（15:15～16:00）授業デザイン

【実習Ⅲ】（16:00～17:00）まとめの謡・仕舞

(2) 本年度能楽講座

講座名：音楽実技「謡と仕舞にチャレンジ」講座

実施日：令和7年8月25日（月）13時30分～17時00分

会場：京都府総合教育センター北部研修所 音楽実習室

講座のねらい：能の謡、仕舞の実技を通して、題材構成を考える。

講師：観世流能楽師 山崎 芙紗子氏（京都先端科学大学人文学部 特任教授）

受講者：14名（小学校9名、中学校1名、高等学校3名、特別支援学校1名）

研修内容：【実技Ⅰ】（13：30～15：00）

「敦盛」と「羽衣」を謡ってみよう舞ってみよう

従前の能楽講座では教科書教材である「敦盛」と「羽衣」を取り扱っていたので、今回も従前と同じ演目を扱うこととして講座策定したが、能楽を始めて体験する受講者が多いことから、謡と仕舞の演目を初心者向けの「鶴亀」に変更して実技Ⅰを行い、「敦盛」と「羽衣」は実技Ⅱで取り扱うこととした。なお、演目「鶴亀」については講師の作成資料を基に、受講者が謡と仕舞の指導を受けた。

【演習】（15：00～16：00）能を授業デザインしよう

協議題として「中学校や高等学校の音楽の授業で生徒が能に親しむようになるには、小学校の授業においてどのような資質・能力を育むべきか」を設定した。また、中学校と高等学校等の音楽担当教諭の協議題は「能を教材とする効果的な授業デザイン」と設定し、それぞれの題材構想を考え全体でアイデアを共有した。

【実技Ⅱ】（16：00～17：00）連吟の楽しみを感受しよう

実技Ⅰで予定していた能「敦盛」と「羽衣」を教材としてどちらもキリ部分の謡い方や仕舞との関連について指導を受けた。

(3) アンケート等の実施について

本年度は当センター能楽講座が4年目となるので、中学校及び高等学校教諭の連続受講者から実際の授業での活用の有無についてFormsアンケートを実施する予定であったが、受講者のほとんどが小学校教諭で連続受講者は高等学校教諭の2名のみであったため、Formsアンケートは実施せず、受講報告や授業デザイン演習での意見交流等から本講座の効果を考察することとした。

(4) 演習について

演習の協議題について、中学校及び高等学校等の音楽担当教諭5名に対してはペア及び3名の2グループで「能楽を教材とする効果的な授業デザイン」としたが、小学校教諭9名に対しては「中学校や高等学校での能楽の学習につなぐための小学校の音楽で身に付ける資質・能力を考えた題材構想」として、ペアもしくは3名の4グループでアイデアを交流した。特に小学校教諭に対しては、「中学や高校の音楽の授業で初めて能に出会ったときに、生徒が能の魅力に気付くためには小学校段階でどのような資質・能力を身に付けたらよいか」と具体的な発問を投げかけて、複数名で題材構想を考えた。

【実技Ⅰ】の能「鶴亀」の謡と仕舞の実技を通じて、リズム感の感受や音楽の身体化の大切さ、日本の音階に親しむこと、地域の祭りや神楽等の教材化など、能のよさにつな

ぐための構想のアイデアが受講者から多く出された。以下は構想の一部である。

①リズムの学習「リズムとなかよし」

めあて：「呼びかけとこたえ」のリズムを手拍子や足拍子で打ってみよう。

- ・小学校低学年のリズム感受
- ・手拍子や足拍子によるリズム感受

②音階の学習「にほんのおんかい」

めあて：「わらべうた」や「こきりこ」から日本の音階の特徴を見つけよう。

- ・小学校低学年や中学年の我が国の音階の特徴の感受

③リズムや旋律の学習「リズムにのったうごき」

めあて：「福知山音頭」「こきりこ」のリズムを体の動きで表そう。

- ・小学校中学年の民謡のリズムの身体化と感受

④和楽器の学習「まつり囃子を演奏してみよう」

めあて：締太鼓や大鼓、小鼓を使ってまつり囃子を演奏しよう。

- ・小学校中学年の和楽器の奏法と身体の使い方

⑤教科をつなぐ音楽の学習「稲作の収穫の祈りの歌と舞をつくってみよう。」

めあて：田植えの学習の際に収穫への祈りを俳句であらわして節や舞を付け、能をつくってみよう。

- ・小学校高学年の他教科と関連させた音楽づくり

小学校の受講者からは多くのアイデアが出て、他教科とのつなげやすさを生かした教科横断的な題材構想が特徴的であった。能楽とは何かについて教師主導で教え込む授業ではなく、子どもがよさや面白さを発見して考える視点も見られ、中学校と高等学校の受講者が新たな視点を得られたことが本講座の成果と考える。

(5) 受講報告の分析と当講座の効果性の考察

当講座の受講報告は以下の項目が設問である。今回、受講報告1の【演習】の記入欄(①重要と考える内容 ②気付きや感想)及び 2 本講座の今後の活用等の3項目について取扱うこととした。

1 講義等について：実施要項の記載順に各講義等の中で学んだ内容や感想等を記入してください。また、各講義等があなたにとって参考になるものであったか、A～D（A そう思う/B ややそう思う/C あまりそう思わない/D そう思わない）の該当するものに○を付けてください。（記入欄：①重要と考える内容②気付きや感想③上記A～D）

【実技Ⅰ】①②③

【演習】①②③

【実技Ⅱ】①②③

2 本講座の今後の活用等について：本講座内容のうち、今後の教育実践に役立てたり、勤務校で広めたりしようと思うことを記入してください。

(5)－1 受講報告からの考察

今回、それぞれの校種の共通性や固有性が受講報告の記述から各項目（【演習】①②及び本講座の活用）について各校種の共通性や固有性を確認しながら、当講座の効果性を考察したい。また【演習】の②気付きや感想においては、実技Ⅰの中で講師から「の謡と仕舞はリズムで、西洋音楽はメロディーに特徴がある」という説明があったので

実技Ⅰの謡と仕舞の体験を通して「リズム」の感受が促され、【演習】の授業デザインに「リズム」に関する授業アイデアの表出が多く見られた。【演習】②の記述においてリズム感を育む授業構想のアイデアもキーワードと考える。さらに【演習】でのアイデアの交流が、中学校や高等学校の音楽担当教諭の能楽の指導に対する既成概念にどのような変容が起こるかについて中学校及び高等学校教諭の【演習】②の記述から読み取りたい。なお、2「本講座の活用等」に関する記述は、【演習】だけでなく講座全体（【実技Ⅰ】【演習】【実技Ⅱ】）の活用意欲に関する記述であるが、講座のねらいを「能の謡、仕舞の実技を通して、題材構成を考える。」と設定しているため、「題材」「授業デザイン」「授業づくり」「系統性」などの表出が講座のねらいの達成の指標となると考える。対象は小学校教諭（9名）中学校教諭（1名）及び高等学校教諭（3名）特別支援学校教諭（1名）の14名の記述による。

(6) 【演習】の記述の各校種の共通性と固有性

(6)－1 【演習】①重要と考える内容(14名)の記述の各校種の共通性と固有性

○共通性

- ・小中高の系統性（能につながる学習、カリキュラムマネジメント）…6件
- ・能の授業デザイン（能を授業デザインしよう、授業構想）…4件

○固有性

- ・小学校 能の教材化…3件（教材化2件、能に親しみ理解につながる授業構想）
- ・中学校及び高等学校 体感させながら学ぶ…1件、能に親しみを持つ…1件
- ・特別支援学校 地域教材の活用…1件

【演習】①重要と考える内容の記述から、校種を超えた共通性として小中高の系統性に関する記述が最も多かったことが特徴的であった。また、小学校の音楽科教科書に教材として能の記載はないが、今回、能の謡と仕舞の体験から小学校において、音楽科授業での能の教材化と授業構想につながったことが特徴的である。

(6)－2 【演習】②気付きや感想等の記述の各校種の共通性と固有性

○共通性

- ・授業構想、授業デザイン、授業案等の言葉の表出…7件（小学校2件、他5件）
- ・小中高の系統性に関わる言葉の表出…6件（小学校5件、他1件）
- ・地域教材との関連…3件（小学校2件、他1件）

○小学校の固有性

- ・「リズム」…言葉の出現10件（同一受講者が一文の中で複数回使用）
- ・他教科（いろいろな教科）等との関連（文章）…5件（小学校4件、他1件）
- ・日本の文化や和楽器等の体験…5名（小学校4件、他1件）
- ・音楽の身体化…5件（小学校4件、他1件）

○中学校及び高等学校の固有性

- ・授業改善やアイデアに関する記述…4件

【演習】②気付きや感想の記述で特徴的であったのは、小学校において「リズム」に関する記述が10件で9名中の6名に見られたことである。特に1文の中に3回の記述が見られた例もあり、小学校教諭の「リズム」に関する記述割合が高かったことが特徴的であった。また「リズム」の記述がなかった残りの3名は、他教科と関連させた能の学習1件、

伝統的な音楽の中学校や高等学校への系統性1件、能の創作1件であった。【実技I】で能の音楽が「リズム」に特徴がある説明との講義から、謡と仕舞の実技と結びつけることによって能の特徴的な「リズム」に関する感受が深まったと考えられ、続く【演習】で「リズム」の学習をねらいとする授業構想のアイデアにつながり、具体的な実技を通して講座のねらいが達成された。また、小学校教諭からは、他校種と比べて教科横断的な視点や低学年から日本文化に触れること、音楽の身体化に関する記述が多く見られた。一方、中学校や高等学校の教諭は、能楽教材をどのように指導すべきかについて悩んでいることがうかがえるが、本演習の小学校教諭のアイデアから授業改善のきっかけを見いだせたことを読み取ることができた。

(6)－3 2「本講座の今後の活用について」の校種の共通性や固有性

○共通性

- ・授業構想、授業づくり、題材、学習指導案等…8件（小学校3件、他5件）
- ・我が国の伝統芸能や伝統音楽…6件（小学校4件、他2件）

○小学校の固有性

- ・日本の伝統文化や和楽器に直接触れる体験…7件（小学校5件、他2件）
- ・「リズム」の学習（リズム遊び）…3件（小学校3件）
- ・他教科との関連…3件（小学校3件）
- ・小中高の系統性（中学高校につながる）…3件（小学校3件）

○中学校及び高等学校の固有性

- ・授業改善、授業活用に関するアイデア…3件
- ・教師の実技力の向上（声の出し方、響き方、体の使い方）…2件
- ・他校種との交流による授業構想アイデア…2件
- ・生徒の謡や仕舞の体験（生に触れる）…2件
- ・授業での仕舞の導入や歌唱の充実…1件

本講座の今後の活用については、教科書に教材としての記述がない小学校と教材化されている中学校及び高等学校においては記述内容に特徴がある。

小学校は中学校や高等学校につながる題材や資質・能力の系統性、我が国の伝統文化や和楽器に直接触れる体験や他教科との関連の内容が多い。一方、中学校及び高等学校は授業で能を取り扱う際の活用に関する記述がほとんどであった。その中でも今回、他校種との交流による授業改善や授業活用に関する記述や教師自身の実技力の向上に関する内容が特徴的であった。また、仕舞等の音楽の身体化を授業の導入に取り入れる記述もあった。特別支援学校においては「鶴亀」の教材化への活用意欲の記述が見られた。

3 本講座の成果と課題

(1) 受講報告の記入から読み取る成果

①【演習】重要と考える内容(14名)

当講座は、謡及び仕舞の実技体験と同等に授業デザイン演習を中心として講座策定した結果、重要と考える内容の記述に「授業デザイン」「教材化」「授業構想」等のキーワードが現れ、小学校、中学校、高等学校への題材の系統性や資質・能力のつながりの大切さが受講者に理解された。また、「能」につながる教材として地域の祭り

や神楽など地域資源へのつながりの記述も見られた。

②【演習】気付きや感想等(14名)

小学校の音楽の教科書に「能」を教材として取り扱う記載はないが、リズム遊びや音楽の身体化などによって「リズム」の学習を積み上げ、我が国の伝統音楽や和楽器に小学校段階から直接触れる体験によって、中学校や高等学校における能の学習への興味や理解につながる事が受講報告から確認することができた。一方、中学校や高等学校は、授業改善のきっかけや授業のアイデアに関する記述が多く見られた。

③本講座の今後の活用等

受講者の本講座の活用意欲として、【演習】の中で共有したさまざまな授業構想に対する活用意欲を確認することができた。特に小学校教諭からは音楽の授業を国語科や社会科、総合的な学習の時間などの他教科とつなぐ内容や地域教材と関連させた内容が出され、中学校や高等学校の音楽担当教諭にとって授業改善への気付きとなったことが受講報告から確認できた。

上記①～③において「授業構想」「授業デザイン」「小中高の系統性」等のキーワードの表出割合が校種を共通して高いことから本講座のねらいは達成されたと考える。

(2) 課題

一方、文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター発表（2025/7/26）の「令和4年度学習指導要領実施状況調査教科等別分析と改善点（小学校音楽科）」において当研究に関わる課題が散見される。教科別分析と改善点（小学校音楽科）**1. 今回の調査結果の特色**（2）質問調査について①質問調査の結果のポイントに“教師質問において、「我が国の音楽や郷土の音楽に親しみ、よさを味わったり、愛着をもったりすること」については、児童の興味・関心のもちやすさ、身に付けやすさのいずれにおいても、学年が上がるに連れて肯定的な回答の割合が減少している。また、児童質問において、「音楽の学習をして、日本の音楽や地域の音楽に興味や親しみをもつようになった」に対して肯定的な回答の割合は約6割である。”と報告されている。（各教科等別分析と改善点 小学校音楽科 p.7より引用）また、②質問調査の結果の概要 ウ児童質問紙調査と教師オンライン質問調査との関係において“教師質問において、「我が国の音楽や郷土の音楽に親しみ、よさを味わった、愛着をもったりすること」について、「児童が興味・関心をもちやすい」、「児童が身に付けやすい」という肯定的な回答の割合は下の表のとおりである。我が国の音楽や郷土の音楽については、児童の興味・関心のもちやすさ、身に付けやすさのいずれにおいても、学年が上がるに伴って肯定的な回答の割合が減少し、第6学年における肯定的な回答の割合が最も低い。また、児童質問において、「音楽の授業で、『ふるさと』などの唱歌や、日本に古くから伝わる歌を歌うことが好きだ」という質問に対して、肯定的な回答（好きだ／どちらかといえば好きだ）の割合は 52.0%である（前回62.9%）。”

教師質問（肯定的な回答の割合）		（%）		
		第2学年	第4学年	第6学年
我が国の音楽や郷土の音楽に親しみ、よさを味わったり、愛着をもったりすること	児童が興味・関心をもちやすい	81.2	76.1	69.0
	児童が身に付けやすい	76.1	72.6	61.7

各教科等別分析と改善点（小学校音楽科 p.11～12より引用）

さらに同資料の「2. 今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点」の(3) 生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実において“我が国や郷土の音楽に関する問題については、いずれも相当数の児童ができて一方、教師質問及び児童質問において、我が国や郷土の音楽に関する項目で肯定的な回答の割合が低い。我が国や郷土に伝わるわらべうたや民謡、歌唱共通教材などの唱歌や童謡、祭りの音楽など、生活や社会の中にある様々な音楽が人々の生活や社会でどのような働きをしているのか、また自分の生活とどのように関わっているのかについて考えることができるよう、児童や学校、地域の実態に応じた人材の活用や教材の選択、題材構成など、指導の工夫が必要である。和楽器を用いた学習についても、引き続き児童や学校、地域の実態に応じて、創意工夫した取組が求められる“と示されている。(各教科等別分析と改善点 小学校音楽科 p.16 より引用) この状況から当センター講座での題材構想のアイデアを担当教員に伝える必要があると考え、以下に示す題材構想例を当センター講座等で示すこととする。

4 課題への方策

中学校音楽授業における授業デザイン例と評価規準例の提示

下の授業デザイン例は、昨年度の当センター研究紀要で提示した歌唱分野のデザイン例の一部である。

①題材「我が国の伝統的な歌唱に親しもう」

②主教材 能「敦盛」(キリ)

補助教材 民謡「刈り干し切り歌」(宮崎県)、相撲の呼び出し

③題材を貫く問い 我が国の伝統的な歌い方の特徴は何か

④ねらい 能「敦盛」のキリの地謡、追分様式の民謡や相撲の呼び出しの歌唱活動を通して、我が国の伝統的な歌唱の特徴を理解し伝統的な歌唱に親しむ

⑤本題材で扱う学習指導要領の内容 中学校第2学年及び第3学年

A表現 (1)歌唱

ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫すること

イ(イ) 声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりを理解すること

ウ(ウ) 創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付けること

〔共通事項〕(1) 本題材において、生徒の思考・判断のよりどころになる主な音楽を形づくっている要素：「音色」「リズム」「旋律」

⑥知識の評価場面の評価規準例：声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりを理解している。

←	評価規準 他←	評価方法←
「十分満足できる状況」(A)の例←	主教材や副教材の他に歌舞伎や長唄、地域の民謡等の声の仕方や声の音色、コブシ、節回し、母音を延ばす産み字などに着目し、声の音色や響き、言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりを理解している。←	ワークシートの記述←
「おおむね満足できる状況」(B)と判断するポイント←	主教材や副教材の発声の仕方や声の音色、コブシ、節回し、母音を延ばす産み字などに着目し、声の音色や響き、言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりを理解している。←	ワークシートの記述←
「努力を要する」状況(C)と判断されそうな生徒への働きかけの例←	副教材の相撲の呼び出しの音楽について声の音色、節回し、産み字等に関する問いを投げかけながら、曲種に応じた発声との関わりを考えさせる。言語化が難しい場合は、ことばの選択カードから選んで言語化を支援する。←	ワークシートの記述、個別質問、ことば選択カード←

5 小学校から高等学校につながる音楽科で育む資質・能力

本講座の実施に当たり、受講対象者を従前の中学校及び高等学校の音楽担当教諭から小学校教諭にも対象を広げたことにより、授業デザイン演習の構想アイデアが広がったことが成果であると共に、中学校及び高等学校で能に親しむためには小学校段階でのレディネスが必要であり、幼稚園及び小学校でわらべ歌を含む伝統的な歌唱や和楽器などに親しみ、我が国の伝統音楽のよきを感受することが中学校及び高等学校で能に親しむ素地となることが当講座によって確認することができた。以下の図は、我が国の伝統的な音楽の特徴の理解を深める資質・能力を関連付ける系統図である。小学校から中学校へつながる資質・能力として、当センター講座等で系統図の例として示していきたい。

	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校1年	中学2,3年
教材名	第1学年教材「ひらいたひらいた」わらべうた「なべなべそこぬけ」	第3学年教材「もの売りの声」「すもうのよびだし」「神田囃子」	5年教材：民謡「ソーラン節」「刈り干し切り唄」	教材：地域民謡「福知山音頭」民謡「ソーラン節」民謡「南部牛追い歌」	教材：能「敦盛」
リズム 八木節様式(拍に乗るリズム)と追分様式(自由リズム)	拍に乗った歌唱活動から拍のあるリズムに気付く。	自由に母音を延ばすリズムと拍のある定型反復リズムに気付く。	八木節様式と追分様式のリズムと動作との関連を理解する。	八木節様式と追分様式のリズムと民謡の背景や動作との関連を理解する。	大ノリの拍節的なリズムと場面の様子との関連を理解する。
旋律 我が国の音階 産字 こぶし、ユリ	2音あるいは3音の音階に気付く。	我が国の民謡の音階に気付く。「もの売りの声」等の産字やこぶしに気付く。	2つの民謡の音階の違いに気付く。歌詞と音階の関連を理解する。	我が国の固有の音階に気付く。こぶしやユリの特徴に気付く。	謡の旋律から産み字やユリの特徴に気付く。
間 合いの手	絵描き歌やわらべ歌の間に気付く。	合いの手や間に気付く。	2つの民謡の間に気付く。	2つの民謡の間や合いの手の効果に気付く。	能「敦盛」のキリの地謡から間に気付く。

図 我が国の伝統的な音楽の特徴の理解を深める小学校低学年から中学校への系統表(例)

6 まとめ

伝統音楽分野において、能は授業担当者がどのように授業を展開するべきかについて困難を感じる教材の一つであることをこれまでの当センター音楽科講座等で確認してきたが、本講座の能の実技や授業デザイン演習によって、小学校、中学校、高等学校の音楽科で育む資質・能力のつながりや題材の系統性について受講者の理解が深まった。

本講座によって、小学校低学年から「リズム」や我が国の伝統音楽の「旋律」に親しみ、そのよきを感受することが中学校や高等学校の音楽の授業で、能を含む我が国の伝統音楽のよきに気付くレディネスとなることを受講者が理解した。

本研究によって、学習指導要領音楽科の目標が示す「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」は、小学校低学年から中学校や高等学校の音楽科の指導内容に関連させて、児童が我が国の伝統音楽を含めたさまざまな音楽に出会う授業を構想することによって育まれることが明らかになった。本研究が「生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実」に資するものとなり、児童生徒が我が国の伝統文化に愛着をもち、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重できるよう今後も研究を続けていきたい。

<文献>

- ・文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター(2025)「令和4年度学習指導要領実施状況調査教科等別分析と改善点(小学校音楽)」
- ・浅井ちとせ(2021)「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発」京都府総合教

育センター研究紀要（第10集）0205.pdf

・浅井ちとせ（2022）「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発－我が国の伝統音楽とICTをつなぐ創作課題－」京都府総合教育センター研究紀要（第11集）303.pdf

・浅井ちとせ（2024）「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発－「能の謡のリズム」を中心として－」京都府総合教育センター研究紀要（第13集）0503.pdf

・浅井ちとせ（2025）「音楽科の思考力を高めるパフォーマンス課題の開発－能の授業デザインと題材を貫く問いの設定－」京都府総合教育センター研究紀要（第14集）0603.pdf

・石上則子、斎藤忠彦他（2021）『中学生の音楽2・3下』教育芸術社

・伊野義博、井上洋一他（2021）『中学音楽 2・3上 音楽のおくりもの』教育出版

・二十四世観世左近（2020）観世流謡本特製一番本『敦盛』檜書店

・二十四世観世左近（2016）観世流謡本特製一番本『羽衣』檜書店

・文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社

・文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説芸術（音楽美術工芸書道）編 音楽編 美術編』教育図書

・伊野義博、勝山幸子、小林美佳、斎藤忠彦他（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 音楽】』東洋館出版社

・吉川英史、金田一春彦、小泉文夫、横道萬里雄他（1980）『邦楽百科事典』音楽之友社